

	学校名: 東松山市立南中学校	
	氏名: 奈良あすか	● 実践教科等: 道徳・学級活動 総合的な学習の時間
		
THAILAND	[担当教科: 社会]	● 時間数 : 6時間 ● 対象生徒 : 1年4組 ● 対象人数 : 38人

1 単元名

「タイの人々の暮らしを通して、私たちにできることは何かを考えよう」

2 単元の目標

ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

- ①タイの例をきっかけにし、相互依存の関係を理解するとともに異文化を尊重する態度を身につける。
【つながりを尊重する態度】
- ②諸外国が抱える課題や問題を理解し、同じ世界で生きる者としてどのような支援や解決策があるか仲間と協力し考える。【多面的、総合的に考える力、他者と協力する態度】
- ③国際社会で活躍する人々の生き方や考え方を通し、周りの誰かのために進んで働く気持ちを育て、社会生活の向上につなげる。【進んで参加する態度】

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る
 - 2 子供の多様な考えを引き出す
 - 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する
 - 4 考えるための材料を見極めて提供する
 - 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する
 - 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する
 - 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る
- ①日本とタイの文化や習慣、生活の中から日本との違いや共通点があることに気づく。【7】
 - ②タイにあるスラムでの課題を通し、生活を向上させるための解決策を考え自分の言葉でまとめ、他者に発表することができる。【2・3】
 - ③世界で活躍する人々の生き方を通し、進んで社会のために活躍することで社会生活の向上につなげることを理解できる。【4】

4 単元の指導について

(1)教材観

タイという国を例に取り、異文化に対する興味・関心を高めるとともに、タイと日本の共通点やつながりもあるということを感じられるよう、動画や写真、インタビューを効果的に使って授業を進めていく。また、相互依存関係の存在も身近にある食事のメニューや製品、建造物を取り上げ、お互いが助け合うことで、一人一人の生活が成り立つことを実感させ、国際協力の必要性を認識させる。具体的な支援の方法は、タイの小学校の取り組みの例や日本人のボランティアの方のインタビューの言葉を紹介し、国際協力は身近に取り組めることであることを理解させたい。国際協力の例を考える際は、スラムでの課題である学校に行けないことを扱い、学校に行けることや勉強できることの大切さを理解し、自分自身の生活とつなげて考えられるようにしていきたい。

(2)児童生徒観

1年生の生徒は、外国に行ったことがあるという生徒は少ないが、地理で取り扱う世界各地の人々の生活の単元では、衣食住に対して知っている内容や疑問点を積極的に発言する生徒が多く見られた。また、1・2時間目の授業後の感想では、多くの生徒が外国に興味を持ち、「外国に行ってみたい」、「ボランティアをしてみたい」という内容を書いていた。

この授業を通して、外国のようすを知るとともに外国で活躍する人の生き方を通し、身の周りでできることはどんなことがあるかを一人一人が理解し、自分の言葉で表現できるようにしていきたい。

(3)指導観

国際理解についての学習を集中的に行うことに対して初めての生徒が多いので、クイズやフォトランゲージを多く活用し、身近に感じられるように工夫して指導していく。また、本校では3年次に国際理解教育を総合的学習の時間に行っている。今後も継続して学ぶことができるよう、国際理解と国際協力についての基礎知識や考え方を身につけさせるようにしていく。

授業では、班活動を多く取り入れ、自分自身の考えを表現するだけでなく、他の生徒の意見を聞き交換するなかで、考えを深められるようにしていく。また、感想用紙やワークシートを使用し、記入することで次の内容に興味・関心をつなげられるようにする。

5 評価基準

【総合的な学習の時間】

観点	よりよく問題を解決する資質や能力	学びやものの考え方	主体的・創造的・協同的に取り組む態度	自己の生き方
評価規準	・タイを通して国際社会が抱えている問題を知り、どのような手段で解決することができるのか考えることができる。	・世界には様々な文化があり、お互いを認め合い、尊重しながら暮らしていることを理解することができる。	・タイでのボランティア活動の様子を通して、協力して取り組む態度を身に付けることができる。	・タイ生活する人や活躍する人たちの様子を通して、現在や将来の自分自身の生き方の参考にすることができる。
評価方法	学習時の取り組みの様子・発表・発言・ワークシートの記述、感想の内容			

【学級活動】

観点	集団活動や生活への関心・意欲・態度	集団や社会の一員としての思考・判断・実践	集団活動や生活についての知識・理解
評価規準	・学校で勉強できなくなる例を通して、普段の生活への関心を持つことができる。	・地域に住む一員として、生活向上にはどのような方法があるのか考えることができる。	・スラムの生活を例に挙げ、世界には様々な環境の中で生活している人々がいることを理解する。
評価方法	学習時の取り組みの様子・発表・発言・ワークシートの記述、感想の内容		

【道徳】

観点	道徳的实践意欲・態度	道徳的心情	道徳的判断力
評価規準	・タイを通し、世界の多様な文化や習慣について興味・関心を持つことができる。 ・相互依存関係の強さを認識し、国際協力の第一歩を実践するために必要な態度を身につけることができる。	・世界で活躍するさまざまな立場の人たちの気持ちを資料から読み取ることができる。 ・問題解決のための方策を考え、自分の言葉でまとめ、他者に伝えるように発表することができる。	・国際協力をする上で、必要な支援や協力内容を正しく判断することができる。
評価方法	学習時の取り組みの様子・発表・発言・ワークシートの記述、感想の内容		

6 単元の構成

【総合的な学習の時間】(学年全体)

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	タイってどんな国？	・タイに関する写真や動画を通して、タイという国を知る。	・タイに関するクイズ(あいさつ・習慣・文化)に答え、話を聞く中で日本との違いや共通点を知る。 ・写真やインタビューを見聞きし、タイから見た日本の様子について知る。
2	JICAが行っている国際協力について知ろう	・国際協力の必要性やJICAが行っている国際協力の例を知る。	・開発途上国の現状についてクイズを通して知る。 ・食事のメニューを用いて、日本と外国の相

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

			互依存関係について理解する。 ・写真やインタビューを通して、タイでの JICA の活動の内容について知り、国際協力について興味を持てるようにする。
--	--	--	--

【学活】(1クラスのみ)

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	スラムについて知ろう	・バンコクにある、クロントーイスラムの写真を通し、スラムが抱える課題や現状を理解する。	・写真を用いてスラムの様子やスラムが抱えている課題を知る。 ・スラムが抱えている課題や問題を解決する方法や手立てはどのようなものがあるか考える。
2	学校に行けないとどうなるの？	・スラムの子どもたちの中には中退者が多いという厳しい教育事情を知る ・子どもたちが学校に行けない原因を考える	・スラムの課題の1つに中退者が多いことが挙げられていたことを振り返る。 ・学校に行けないことによってどのような問題や課題が生まれるかを班でのカードの並び替えによって読み取る。 ・負の連鎖を断ち切ることができるか、できるのであれば、どのような方法があるのか考える。
3	文字が読めないってどういうこと？	・学校に通えないことで生じる、読み書きができない感覚を体験する。	・読み書きができないことで生じる不便さや気持ちはどんなものか、ゲームを通して感じ考える。

【道徳】(1クラスのみ)

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	プラティーブさんの生き方から学ぼう	・クロントーイスラム出身のプラティーブさんの生き方を通し、私たちにできることを考える。	・スラムの課題を受け止め、改善させようとするプラティーブさんの取り組みの内容から、更なるスラムでの生活の向上につなげるためにはどのようなことがあるか考える。 ・私たちはさまざまな社会集団に属している一員であることを自覚させ、お互いに協力することの大切さを理解する。

7 授業事例の紹介

小単元名【プラティーブさんの生き方から学ぼう】

(1) 指導案

(ア)実施日時 11月8日(火)第6限 道徳

(イ)実施会場 1年4組教室

(ウ)本時の目標 C 主として集団や社会との関わりに関すること (社会参画・公共の精神)

①よりよい社会の実現のために活動したプラティーブさんの生き方を知り、社会と関わることの大切さを理解する。(道徳的心情)

②スラムでの生活を向上させるための方法を考える中で、自他ともに協力して社会と関わろうとする態度を養う。(道徳的实践意欲と態度)

(エ)指導のポイント ①スラムの課題解決の案については2つとし、前回の授業で学んだ内容を生かしながら考えられるようにする。

②身の回りの社会に対して積極的に関わることの大切さを伝えられるようにしていく。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
-------	------	------	------	---------	-------------------

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

導入 5分	1 スラムの生活について振り返らせる。	・スラムの様子について復習する。 [発問]「スラムはどのような場所だったか」 →ゴミがたくさんある →道路がせまい →線路の近くに家がある	一斉	・スラムの写真を提示し前回の内容と結び付けられるようにする。	・前時に学習したスラムの内容を振り返り、学習をさらに深めようとしているか。(関心)
展開 ① 10分	2 プラティープさんの生き方を読み、社会とかかわることの大切さについて関心を高めさせる	・プラティープさんの生き方をまとめた話を読む。 [発問]「プラティープさんはどこで生まれましたか」 →タイ →バンコクのクロントーイ →スラム	一斉	・初めて読んでもわかりやすい内容にする。 ・プラティープさんの顔や活動のようすがわかる写真を見せる。	・プラティープさんの生き方の話を読む中で、彼女の考えを理解することができる。(理解)
展開 ② 30分	3 スラムの生活の向上について考える 4 私たちにできることは何か考える	・スラムの生活を向上させるためにどちらの方法がいいか考える。【4・5】 [発問]「スラムの生活をよくするためには、どちらの方法がよいと思いますか？」 ①スラムをなくすために、スラムから出て別のところで暮らす ②スラムに残り、スラムのために働き、スラムを豊かにする ・それぞれの考えの良さを班ごとに発表する。【3・7】 [発問]「2つの方法の良さをそれぞれ発表しましょう」 ・質問をし合い、お互いの考えを深め、内容を知る。 [発問]「お互いの考えを詳しく知るために、質問を出し合いましょう」 	一斉 班	・プリントに理由を先に記入させてから、挙手をさせ、人数を確認する。 ・同じ意見同士の班をつくり、それぞれの考えの良いところを班で出し、紙に書き込む。  ・時間があるときは、意見をまとめた紙を机の上に置き、お互いの意見を見合う。 ・疑問に思った点や考えをお互いの立場から質問し答えさせる。その際、言い合いにならないように注意する。	・仲間と協力し、関心を持って話し合いに参加しているか。(関心) ・自分自身の考えを言葉で表現することができるか。(表現) ・他の班の意見を見聞きしているか。(態度)
まとめ 5分	5 教師の話聞き、感想を記入する	・本時の感想をプリントに記入する [教師のまとめ]「自分も他人もよりよく生きるためには、進んで社会とかかわり積極的に行動することが大切である」	一斉	・プラティープさんのように、この社会の全ての人々が自他ともによりよく生きようとしていることを自覚させる。 ・現在のパタナー共同体小学校の写真や幼稚園の写真を見せ、プラティープ財団が行っている例を紹介する。	・私たちがよりよく生きるためには自他ともに協力して社会とかかわることが大切であることを理解する。(理解)

【備考 1年4組 男子21名 女子17名 合計38名】

(2) 授業の振り返り

①ねらいを明確にし、授業を行うことが重要である。

授業を行う中で、教師自身がねらいをとらえきれておらず、生徒たちの感想の中には「むずかしかった」「よくわからなかった」という内容もあった。教師が1時間の授業の中で何を伝えたいのかを明確にすることが子どもたちの理解にもつながるということを改めて実感した。開発教育やESDに対する意識や考え方を整理させ、教えられるようにさらに努力していきたい。

②五感を生かす授業ほど生徒の興味・関心をひく

ゲームやクイズ、実物、写真、動画を取り入れて行う内容ほど興味・関心を持つ生徒が多かった。実際にその場に行ったような気持ちになった生徒も多かった。しかし、内容によっては用いる量が少なくなってしまうものもあったので、偏りがないように工夫していきたい。

③話し合いの取り入れ方を工夫することで意味のあるものになる

スラムでの生活向上の方法について話し合う場で意見はたくさん出たのだが、感想では、「相手の意見が聞けてよかった」「いろいろな考えをもっていることがわかった」という内容が多かった。意見を言うことに慣れてきた生徒が増えたが、出てきた意見をまとめ、学んだ内容や事柄と結びつけ考えを深める点では課題が残った。どのような視点で話し合うのかなど、指示をわかりやすく提示し進めるなどの工夫をさらに行う必要があることを改めて学んだ。

(3) 使用教材 (パワーポイント資料)



【タイと日本の物価の違い】 【相互依存関係を朝食で紹介】 【シニアボランティアの方の話】

(4) 参考資料等

- ・JICA 国際理解教育実践資料集
- ・JICA PROFILE
- ・「アジアにかかる虹」スミット・ヘーマサトン著 アキン・ラピーパット著 野中耕一編訳 大同生命国際文化基金 1987 年
- ・「体験するアジア」秦辰也著 プラティープ・ウンソンタム・秦著 明石書店 1997 年
- ・ワークショップ版 世界がもし 100 人の村だったら 開発教育協会

8 単元をとらえた児童生徒の反応/変化

① 外国に対して興味を持つ生徒が増えた

外国に行ってみたいと答えた生徒の数(188 人中 167 人)

理由 ・もっといろいろな国のことを知りたいから。

・自分の国と似ているところや違うところを探してみたいから。

・外国に行けばいろいろな人と交流ができ、仲良くできるから。

② ボランティアを行いたいと考える生徒が増えた

ボランティア活動を行ってみたいと答えた生徒の数(188 人中 143 人)

理由 ・誰かのためになることをやりたいと思ったから。

・ボランティアは人の役に立つとてもいいことだなと思ったから。

・困っている人の多さに驚いたから。

③ 国際協力のために普段の生活から見直そうという生徒が増えた

感想 ・まずは、給食を残さないようにしたいと思います。

・食べ物を残さずにきちんと食べようと思いました。

・スリーデーマーチのボランティアなどから始めてみたいと思います。

④ 文字が読めることを実感することで、生活が便利になることを知ることができた

感想 ・世界で文字が読めない人が 20%もいることに驚きました。

・世界にいる文字の読めない人たちは、文字を勉強したくないわけではなく、勉強をしたくてもできない人なのだとわかりました。

・日本の人は文字が読めて幸せだなと思いました。安全な生活を支えているのは文字も関係しているのだなと思いました。

・これからは頑張って勉強したいです。

⑤ スラムの例を通し、世界には様々な環境の中で暮らしている人々がいることを学べた

感想 ・日本と真逆の環境でびっくりしました。



- ・スラムの町がきれいになるように、ルールを作ったりしてみたらどうかと思いました。
- ・世界からスラムが減ってほしいと思いました。
- ・私たちにできることがあったら何でもしたいです。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

P【計画】

- ・あらかじめ授業案の概要を作成してから海外研修に参加することができたので、必要な資料を多く得ることができた。
- ・得てきた資料の中から生徒の興味をひく教材を選び、準備することができた。
- ・他の研修参加者と情報交換を行いながら計画を立てることができた。
- ・管理職や他教員に使用する教材や指導案を見てもらい、何度も見直しをした上で授業に臨むことができた。

D【実践】

- ・クイズやゲーム、話し合い活動を取り入れ、生徒主体の授業を毎時間展開した。
- ・写真や動画を使い、実際にタイに行ったような感覚が持てるように工夫した。
- ・週1日の授業を6回行うため間隔が開いてしまうことから、各授業の内容を結びつけて行うことを心がけた。

C【検証】

- ・管理職や他教員に授業を参観してもらい、改善点や助言を次の授業につなげた。
- ・生徒たちに本時のねらいが伝わっておらず、「難しい」という感想の内容になってしまう授業もあった。
- ・スラムを扱った授業では、写真だけでは実感がわかない生徒が多く、自分自身の生活と結び付けて考えることがほとんどできなかった。生徒にどうやって当事者意識を持たせるかが課題であることがわかった。
- ・生徒の意識定着のためには、進級しても継続して行うことが大切であることを再認識することができた。
- ・外国の現状を見たことがない、行ったことがないという点を踏まえて教えることの大変さを改めて知ることができた。

A【改善策】

- ・ねらいをわかりやすく提示し、どんなことを学ぶのかを生徒に最初に知らせる。また、授業の途中やまとめの際にもねらいを伝え、生徒の意識がそれないように注意する。
- ・開発教育や国際協力に関しては、継続的に授業を行うことが大切である。社会の授業でも関係している単元や内容を扱い、さらに意識を高められるようにする。
- ・身近な話やものに例えたり、使ったりした内容ほど印象に残りやすいことが生徒の態度や感想から読み取れたので、さらに注目してもらえよう、工夫した資料作りを継続して行っていく。

10 教師海外研修に参加して

研修中に「相手に対して一方的にならない支援が重要である」ということを改めて知った。この、相手のことを考えるという点は、日頃の生活にもつながるものである。日頃から相手の気持ちや思いを考えて行動することが大切ということを生徒たちに伝えていきたい。

また、様々な物事を広い視野で見つめて考え、課題解決のために身近なところから活動することが必要である点も今回の研修で新しく学んだことである。この点を授業で伝えようとしたところ、外国に行ったことのない、外国の様子を知らない生徒を対象に行うことの難しさを痛感した。身近な物事として国際課題を捉えていくには普段の授業や会話の中から国際理解につながる内容を取り入れることが必要である点を再認識することができた。

今後も、さまざまな角度や視点から国際理解や開発教育の授業ができるよう、情報収集などを行い自分自身の指導力向上にも努めていきたい。